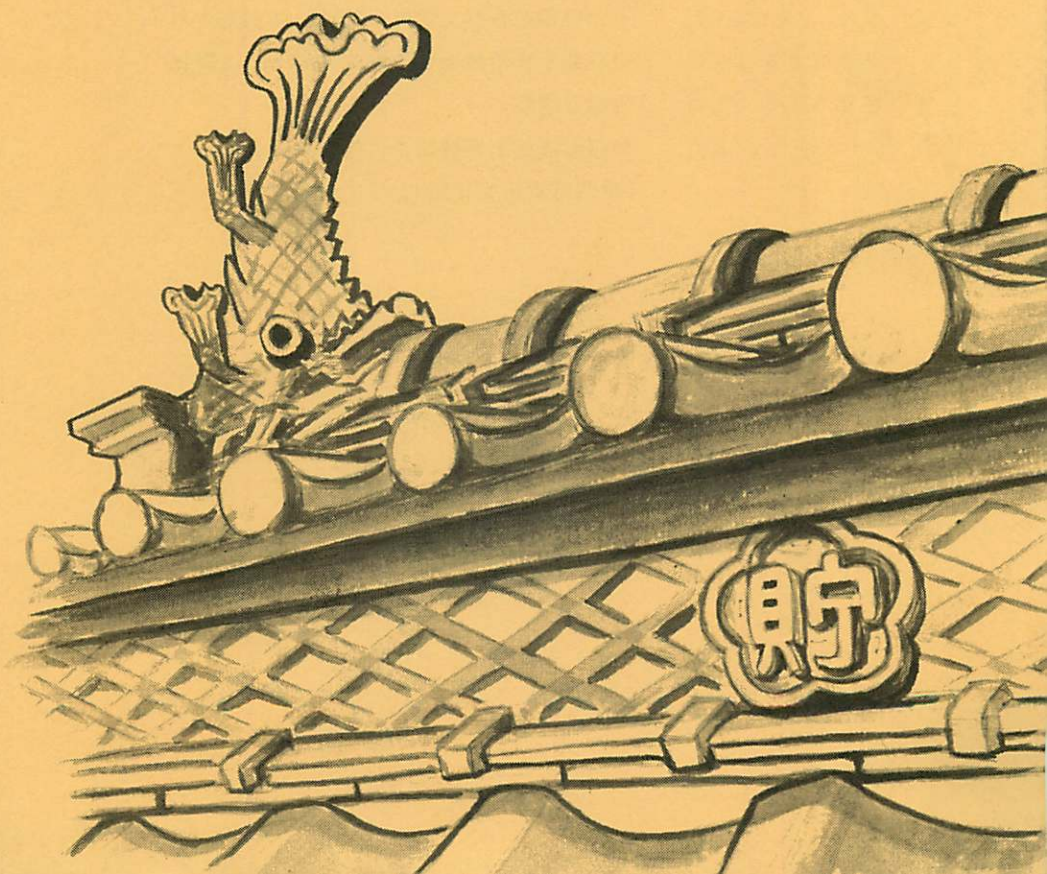


老舗の街・尾張町シリーズ 6

歴史と共に歩む尾張町町民文化館

しゃらかから
鯨瓦の聞いて見てきた尾張町の変遷



町民文化館の歴史概略

《建造以前》

- 明治10年 8月 金沢第十二国立銀行が創業(金沢市堤町)
同銀行本店が尾張町4番地に移転(現在地)
- 明治17年 1月 富山第十二国立銀行金沢支店となる
- 明治26年 6月 金沢貯蓄銀行本店として開業

《建造以降》

- 明治40年12月 同銀行本店を新築落成<現町民文化館の誕生>
- 昭和18年12月 北陸銀行尾張町支店となる
- 昭和51年 7月 同銀行尾張町支店が金沢支店に統合され閉店
8月 北陸銀行より石川県へ本建物を寄贈
9月 石川県指定有形文化財(建造物)に指定される
- 昭和52年11月 県立郷土資料館分館町民文化館として開館
- 昭和61年 3月 同館を閉館
6月 尾張町商店街振興組合に運営移管され
「尾張町町民文化館」として新装開館

目 次

まえがき：昔の尾張町の子供達と私(鯀瓦)	2
鯀瓦の自己紹介	3
鯀瓦が生まれるまでの銀行物語	4
鯀瓦の見る北陸銀行の石川県寄贈に至る英断	5
石川県郷土資料館分館・町民文化館として	7
商業と文化の市場・尾張町町民文化館概要	9
あとがき：続鯀瓦のつぶやき	11

昔の尾張町の子供達と私(鯉瓦)まえがきに代えて

私は旧北陸銀行尾張町支店の Teppen に座っている鯉瓦 [しゃち・かわら] である。私は明治 40 年に生まれた.....。と書き出すと、丁度「坊ちゃん」と同じだ。

私を支える土蔵造りは当時としては超モダン、煉瓦 [れんが] 造りの建物と比べて決して遜色はない。むしろ北陸随一の大都会金沢市の、当時一番の繁華街 尾張町の情緒に誠にピッタリマッチした建物であった。

生い立ちとも角、私、鯉瓦には沢山の友達があった。そうそう、最初の友達は、通用門のわきに立っていた松の古木と、大きな庭石である。この二人は、私と一緒に尾張町の変遷と、金沢の息吹を永く吸って来た間柄だ。

彦三の大火も、ご大典(今上天皇)の行列も、七連隊の兵隊さんの出征もこの二人と共に眺めて来た。

昭和に入って初期の頃には、明るい賑やかな友達が沢山出来た。尾張町の子供達だ。大宮の一郎ちゃん、テント屋の秀ちゃん、和ちゃん、桜井の余窩っちゃん、唐津の玉ちゃん、植忠の正ちゃん等々、随分と銀行の庭先や玄関口を遊び場所に使っていたもんや。ところが 10 年ほど前、銀行が駐車場をつくるため、最初の大切な二人の友達を共になくしてしまった。これは今も私の大きな悲しみである。しかし、この悲しみは元気な町の子供達の思い出で随分と慰められて来た。晴れた日など、今でも、あの頃の子供達の澄んだ笑い声がこだまして来る。そうした子供達の大きく成長するにつけ、大東亜戦争直後の混乱時代が偲 [しの] ばれるのだ。新円、旧円の切り替えの頃は、見たくはない家庭のトラブルも眺めて来た。尾張町の繁栄が片町方面に次第に吸い取られるくやしきにも、高い屋根から飛び降りることも出来ず、歯ぎしりをしたものだ。

時代の流れか(昭和 51 年)、今度銀行から石川県へと、私の主人も変わるようで、下では毎日忙しそうにしている。

だが、私、鯉瓦には相変わらず Teppen に是非居てほしいとなると、一つ言いたいことを言おうと思う。

それは、その時代その時代の子供達が、丈夫で成長し、時代にマッチした若々しい思想を持つ青年として活躍するのを見守りたいということだ。.....歴史は、後世から見れば際限のないものだが、私の命ある限りは、この尾張町を見守って、子供達のつくる繁栄の歴史を後世に語り伝える生字引となりたいと念願するのみ.....。

<テント屋の秀ちゃん記>



鯨瓦の自己紹介

私(鯨瓦)の住んでいる建物概要をPRすると

[主体構造は木造平屋建て、建坪約204㎡で、外部を塗籠[ぬりごめ]土蔵造・黒漆喰[しっくい]仕上とし壁腰部に石川県産の赤戸室石を積込む。

入母屋・瓦葺きの反りを持ち、棟上に一對の鯨を立てる城郭風の主屋根をのせ、内部は壁、天井ともに白漆喰仕上で、装飾は精巧な左官細工、柱や扉、窓の額縁は木造りで様式的装飾を付し、飴色のワニスで仕上げて白壁とコントラストをなす擬西洋建築様式ないし擬和風建築様式ともいえる不思議な調和を持つものである。

これまでの建築様式にこだわらない自由奔放さに満ち、特に部屋中央のアーチは圧巻である。また内部の柱はエンタシスと呼ばれるもので、その表面に縦に

つけられた筋が僅かな膨らみを持つ様式の柱で、現存する数少ない貴重なものである。柱頭部にはアカンサス(日本名ハアザミ)の浮彫模様があり、ギリシャ・ローマの古典建築物に多用されている。」ということです。

一説によれば、北陸の春先のフェーン現象で起き易い火災を防ぐために、加賀藩時代から町火消しや大名火消しを配置すると共に燃え難い土蔵造りが盛んになっていたため、この工法を用いて外観を作ったといわれる程に地元密着の建物だったわけです。

鯧瓦が生まれるまでの銀行物語

私(鯧瓦)が生まれる前のことを聞くと、やはり金沢発祥の地であり、藩政時代は前田利家公の出生地である尾張名古屋の荒子地方より招いた商人の町尾張町らしくその活況は大変なものだったようだ。明治維新という大変革期を迎え、西洋諸国に追い付かんと急激な富国強兵策を行なったりで、インフレーションから松方デフレーションと経済や社会・政治が揺れ動いたにも関わらず、時代を敏感に先取りする老舗の旦那衆の底力がものを言ったのだろうか。

明治10年8月に金沢第十二国立銀行が誕生するが、その資本金20万円の内前田家が70%、地元金沢の商人(北前船で有名な廻船問屋の木谷藤右衛門など)が30%であったことからみても、前田家が如何にこの界限に力を入れていたか分かるようだ。

事実、当初は前田家御用弁方の事務所のあった下堤町51番邸(現在の金沢スカイビルの一角)を同行の本店としたが、間もなく下堤町54番地(同金沢スカイビルの一角)から尾張町4番地(現町民文化館敷地)に本店を移し、金沢の中心商店街であり前田家ゆかりの場所にしっかりと根を降ろしていた。

けれど士族優先の経営はやがて先細りとなり、明治17年1月商人主導型の富山第百二十三国立銀行と合併が行われ、富山第十二国立銀行が誕生する。本店は富山第百二十三国立銀行本店のあった富山に移り、金沢第十二国立銀行本店跡地(現町民文化館敷地)は富山第十二国立銀行の金沢支店となって行く。

明治26年になると貯蓄銀行条例が施行され、これに伴って6月に金沢貯蓄

銀行が開業することになる。

ただ金沢貯蓄銀行は第十二国立銀行の先々代頭取が中心になって創設したため、創立当時から十二銀行と深い関係を持っていたといえる。

そのため同行の本店は明治25年6月に第一国立銀行(現日本銀行)金沢支店跡の南町へ移転した富山第十二国立銀行の金沢支店跡地(現町民文化館敷地)に置くことになった。

石川県の産業・経済は日清、日露戦争の影響を受け、特に繊維工業は戦後の反動不況で一時的に大きな打撃を受けていたが、明治31年に金沢に設置された第九師団は、それ以降の経済に良い意味での影響をもたらしたといえる。

又この年は北陸線が金沢まで開通し、金沢貯蓄銀行もこうした状況を踏まえ堅実な業績の歩みを進むこととなったようだ。

余話になることと思うが、明治25～26年頃の銀行風物誌を「金沢市史」(上巻)から引用すると「これらの銀行の店構えは、表は間の荒い太骨の吉原格子をはめてガラス障子とし、内部は畳敷きで格子矢來を引き回して机を並べ、事務員は紺の角帯に前掛け姿で、7～8人が事務をとり、重役や支店長は、奥の方で結城紬など絹物の羽織に前掛けなしで、格子矢來の高い机に向かっている格好は仲々威厳のあるものであった。事務員の給料は5円から7円くらいで、1万円の出納があればお祝いの鏡餅をくばり、小切手も1, 2, 3, 4, 5円が普通で、大口は50円くらいであったと言われる。しかし、明治37～38年頃から、事務用品も椅子とテーブルを使用し、事務員の服装も次第に洋服化されてきた。」とあり、今から見ると本当に時代の様相を感じさせられる思いがする。

【資料：北陸銀行「創業百年史」より】

鯉瓦の見る北陸銀行の石川県寄贈に至る英断

明治40年12月に金沢貯蓄銀行は本店を新築し、その様式は貯蓄銀行らしく堅牢につくられ、和風・洋風の技術を組み合わせた土蔵づくりの立派な建物となった(現町民文化館)。私(鯉瓦)も一番高い処に作られ、初めて尾張町界隈の老舗をこの眼で見ることの出来た記念すべき一瞬だった。

実際の営業開始は明治41年1月2日の午前1時からで、記念に紅白の鏡餅を配るなどあの頃ならでわの風情があり、今でも当時を思い出すごとに懐かしい味に舌なめずりしてくる。

成落築新店本

明治四十一年一月二日午前一時ヨリ開店(香川支店)可致聊カ祝品献呈可仕候

明治四十一年一月二日午前一時ヨリ営業始可致例年之通紅白鏡餅献呈可仕候

全澤市尾張町開業地
會社 金澤貯蓄銀行
電話 三三三三番
尾張町三三番

全澤市十三町町六十一番地(全澤町)
會社 金澤貯蓄銀行
尾川支店
電話 二二二二番

同市上石町百十四番地(全澤町)
同 小立野出張所
電話 四七四番

昭和11年5月に大蔵省より「一県一行主義」が発表され、昭和17年5月には金融事業整備令が公布されて銀行の合併が進んで行ったようだ。実際、戦争による国家総動員法の兵役徴収で、経営的な問題もさることながら、私の足元を見ても働き盛りの若い男の銀行員が極端に少なくなっているのに気がついたものだ。

過去に深い関係にあった富山第十二国立銀行も、昭和18年7月には高岡銀行・中越銀行・富山銀行を合併して北陸銀行となった。そして翌18年12月には金沢貯蓄銀行も北陸銀行と合併することとなり、看板は北陸銀行尾張町支店に変わることになった。戦争での物的・人的不足の中で合併後も大巾な支店が廃止されたが、私の住む建物の魅力と尾張町の老舗の底力がここを必要と認めさせたのだろう。

金沢は幸いにして大規模な戦災を免れ、ただ空をかすめて行くB29爆撃機を見るだけで一発も爆弾が落ちず、私もホッとした覚えがある。おかげで終戦

を迎えても、戦前からの伝統が色濃く受け継がれ、特色ある地域を形成して行けることになった。北陸銀行尾張町支店はこれらを金融的側面からバックアップしながら、より一層尾張町界隈に溶け込み、同時に業績を伸ばして行った。

昭和51年7月北陸銀行は支店の統廃合の関係から、尾張町支店を金沢支店に統合し閉店せざるを得ない状況に立ち至った。私も屋根の上から今後の身の振り方を心配していたが、さすがに地元優先の銀行だけに簡単に建物を壊さず、8月には石川県に寄贈するという英断をし、目を見張る思いがしたものだ。明治時代の由緒ある建物を保存するという地元の要請もあったけれど、合理化という名目であっさり壊してしまうほうがどれだけ面倒が少なかったかを考えると私の運の良さ、人々の愛着の深さを痛感させられる。

【資料：北陸銀行「創業百年史」より】



石川県郷土資料館分館・町民文化館として

北陸銀行の深い理解の基に寄贈された私は、早速専門の先生方にいろいろ見てもらい、9月には石川県指定有形文化財(建造物)に指定されるという榮譽を受けたのです。外観が和風で内部が洋風に仕上がりに、建築以来70年近く経っているにもかかわらず基本的にはほとんど痛んでいない堅牢さ、そしてやはり

屋根の上の私の雄姿の賜物でしょうか。

何といっても金沢の原点、尾張町にふさわしい枯れた容姿が明治を今に残す様式として、永く保存する価値を見出だされたのです。

昭和52年11月にいよいよ新しい主人の下で私は化粧直しをして石川県郷土資料館の分館・町民文化館として開館しました。これまでの銀行一筋の生きかたから一新し、藩政時代から今日までの町民文化財を展示公開する施設として活用する意味で名称も変わったのです。

主に展示していた獅子頭のほとんどが近世末期に造られたもので、加賀三名工といわれる「武田有月」「松井乗運」「沢阜忠平」の作品もあったようである。なお、加賀獅子頭は他地方のものに比べて非常に大きく、大きなものになると前幅70cm、奥行120cm、重さ20kgというものもあり、さすがの私もたじたじとした思いでした。

金沢市周辺には100以上の獅子頭が伝承され、町民文化館ではそのうち30頭余りの寄託を受けていたはずです。(彼等は現在は県立歴史博物館の収蔵庫でしばらくの休息をしているはずである。)

同じく展示されていた獅子舞の由来は詳らかでないが、やはり近世末期に特に盛んであったと聞く。

加賀獅子舞は男壮活発な動作で棒・薙刀・太刀・鎖鎌などをもって獅子を退治するという全国でも珍しいもので、今なお一部では祭礼に出して町を練り歩き旧藩当時の光景をしのばせるものがある。

獅子は頭と胴体からなり、胴体は麻布を数反縫い合わせ長さ9～13m、幅7mの袋状とし、獣の渦毛[うずけ]と牡丹花の模様を染めてカヤという。

獅子頭の左右にカヤのフチを持つ若者10人余り、皆友禅縮緬[ちりめん]または本縮緬に黒の半襟をつけた半纏を着、朱らしゃに町名を白く現わしたケンタイを前腰につけて一人は獅子が生けるが如く棒振りに呼吸を合わせて頭を上下左右に動かす。

棒振りは頭にシャンガンという黒または白の馬毛で作ったものをかぶり、その服装は友禅染の小袖をつけ、袴をはき、棒・薙刀・太刀などの武器を持って一

人ないし三人で演技しながら獅子に向かって行くのである。棒術では現在まで伝承されているのは半兵衛流をはじめ七流が残っているとのことである。

【展示内容は県立町民文化館のパンフレットより引用】

全国を見ても特異なこの加賀獅子舞の特徴は、獅子頭だけでなく、その胴体にあると言って良い。大きな胴体の内側には中囃(芸者衆の三味線や町内の若衆の太鼓で囃す)が入り、ひいきの芸者や、日頃思っている若者を一目見んと集まる人手も多く、百万石の庶民の心意気をみせてくれている。

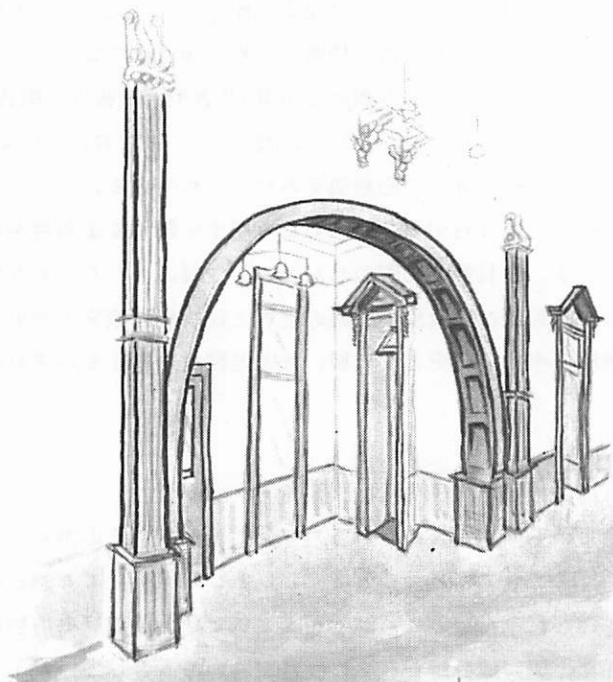
こうした常設展示以外には石川県全般にわたる郷土に関する企画展を開催していたことを思い出す。引札展、加賀のれんとふくき展、かわら版刷り物展、看板とのれん展、正月の遊び道具展、金沢の芝居と映画展、鶴来の歴史と文化展、髪結いと化粧展、小松の歴史と文化展、昔の地図展などとそれぞれに興味は尽きなかった。

商業と文化の市場・尾張町町民文化館概要

私も屋根の上からいろいろ主人の変わるのを見てきたが、その誰もがこの尾張町界限に愛着を持ってきてくれたことは、ピンとシッポを立てる鯉瓦の姿勢通りに自慢できることだった。ところが昭和61年には、県立歴史博物館が完成することで県立郷土資料館分館としての役目が終わろうとしていた。この魅力たっぷりな私を生かしてくれる新しい主人は一体誰だろうかと思っていると、嬉しいことに地元の尾張町商店街振興組合であり、大好きな子供達である尾張町若手会であった。町民文化館の名前もそのまま世襲してくれた新しい主人はこれまでの銀行、石川県と違って、商店街の運営ということで私の取り扱い方も相当変わってきたようだ。

尾張町は金沢の最も古い繁華街であり、地理的にもお城・尾崎神社・浅野川・卯辰山・そして近江町市場などと交差する地でもあるとともに、城下町として、また明治大正ロマンと現代と未来までが交錯する合流点でもあることを深く自覚し、今まで以上に活気ある街として蘇えらせ、伝統から未来への産業工芸県を目指す文化県としてのシンボルゾーンとなり、ユニークでエキサ

イティングな「街創り」を、この藩政以後の「都市の歴史の館」とも言うべき建物を中心に展開します。〰〰〰



何か今まで考えたこともないようなことを言われ、ちょっと戸惑ってしまうけれども、新しい時代に合った私の魅力を発見してくれたことには間違いがない。ここで尾張町運営の概要を紹介させて頂こう。

◆月毎のメインテーマによる展示

石川県内の各地域の文化・伝統産業特集展の企画や、その関連作家たちの将来性ある人と作品を紹介する

◆老舗の街・尾張町界隈の商業と文化芸能の発見

代々老舗に伝わる愛蔵品の展示や、そのオークションを通じて街の魅力に触れてもらう

◆各種イベントの開催

主体的に地域文化振興に寄与する催事を行い、時にはミニパフォーマンスをも開催する

◆文化教養セミナーの開催

日頃生活の中に忘れがちな地域の個性ある芸能文化を発見したり、時代の先端を行く情報に接したりする場とし、一方では公民館的要素を持たせる

◆喫茶コーナー

地元の人や観光客に充実した時間を過ごしてもらい、人と建物、人と人の「出会い」の素晴らしさに浸ってもらう

◆常設の展示即売コーナー

市内・県内を中心に、小さくとも本物指向で、町民文化館の雰囲気にもマッチした、単なる土産品でない価値ある品を常に発掘して展示即売する

これは、尾張町商店街振興組合・尾張町若手会がこの町民文化館を固定的に運営することなく、常にクロスオーバーさせ、期間的にも催事は最長1ヶ月とすることで変化を持たせ、この町民文化館の雰囲気を尊重した事柄や人々に門戸を開き、発表・発信の場となるようにしたい！という情熱の現れではないかと私は信じています。きっと来館されるつどに新しい魅力が発見されると思います。是非、私(鯉瓦)を目印に来て頂けるのをお待ちしております。

統・鯉瓦のつぶやき

.....あとがきに代えて

永い間、時間を泳いでいると見えるものと見えないものが走馬燈のように通りすぎていく。私の前にも多くの歴史と浪漫があったように、私の目前でも多くの物語が出来上がっていった。「行く川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず.....」(鴨長明: 方丈記)と、時は休むことなく流れ行く。その中で現在は、未来への萌芽を絶えることなく熟成して行くのだろうか。

鯉瓦としての私はただ見下ろすだけのもどかしさを感じながら、さらに新しい子供達に鯉瓦の息吹を感じさせたいと願いたい。なぜなら歴史は決して絶え

ることがないのだから。どんなささいな中でも、必ず未来の可能性は生きているのだと信じつつ。大切なものを忘れず、仮に名古屋城の金の鯱ほど私が立派でないとしても、心は加賀百万石の錦をまとった立派な鯱瓦の自負は忘れてはいないのだから。

親父の心息子知らず、というのはどうも他の町の話らしい。屋根の上から見ていると、新しい子供達が若手となり、尾張町の商店街と別に自分達でさっきと若手会というものを作ってしまいながら、その実もっとも親の心を大切にしているようだ。人情の根本を知る私にとっては、涙が出るほど嬉しいことだ。今まで生きてきた甲斐があったというものだ。

石川県の町民文化館としての折は、金沢市内その他から集まった獅子頭がワイワイがやがやと言いながら一種の威厳を保ち、私にとってはそれなりに楽しい仲間達を得させてもらっていた。でも元気に動き回るということでは、今私の下で一生懸命に街創りをしている若手会には適わない。昭和61年から、石川県の粋なはからいで尾張町商店街振興組合に使わせるようになったのも、元はといえばクチバシの青いこの若手会の情熱によるところなんだから。次々と繰り出される活動には荒削りではあるけれど心をツツツと沸き起たせるものがある。老舗の子供達も商売の修業を終えてどんどん帰って来るし、商店街の役員を見てもいつのまにかこの若手会の子供達の数が増えている。時代を見極め、この街なりの個性と魅力を信じて動き回る新しい子供達に誇らかな気持を感じるのは私だけではないだろう。

最後に私を紹介するに当たって、いろいろ資料を提供してもらった北陸銀行や石川県の関係の人々に屋根の上より改めて感謝致します。

<秀ちゃんの子供達>

さし絵 村上隆氏(尾張町・村上洋品店社長)

1987年6月発行

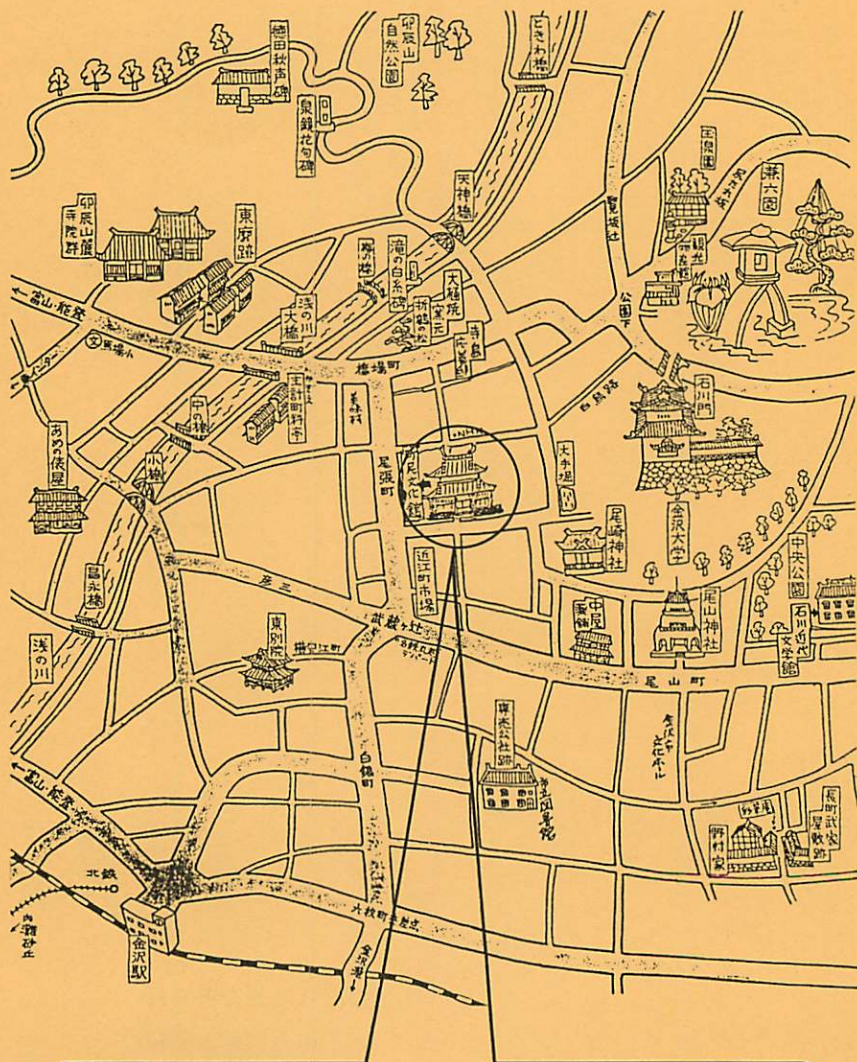
尾張町商店街振興組合

理事長 山田 勝二

尾張町若手会

会長 石野 琇一

金沢市尾張町一丁目11番8号



開館時間 午前10時より午後7時まで

開館日 年中無休

入場 無料……どなたでもお気軽に

住所 金沢市尾張町1丁目11番8号 ☎22-7670